

第210回 「元気に百歳」クラブ「道草」新句会開催

久しぶりの「新橋ばる一ん」なのに、JR新橋駅から「ばる一ん」までの街の様子は相変わらず忙しくて、まるで毎月来ているような普段通りの気持で、本日の教室205号へ入って行きました。変わったことと言えば、体温の測定と参加票提出という作業が増えたことでした。通信俳句形式の句会になって、足掛け3年の俳句サロン「道草」になります。句を仕上げるまでの考察時間が、長くなったことが要因と思いますが、皆さんの句に一段と光るものが見えて来ました。これからも作句にますます磨きがかかることを祈念致します。

6月の新句会に参加された方々は、下述の10名ですが、投句に参加していただいた全17名のうち、7名の方はそれぞれご都合が重なり、新橋ばる一んには参加されませんでした。

◎ 今月、投句に参加いただいた方々。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島懂岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然（17名）

◎ 6月17日（金）、新橋ばる一んの新句会に参加された方々

芦川創風さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、君塚明峰さん、高瀬荻女さん、中島懂岳さん、原晶如さん、本間傘吉さん、芦尾白然（10名）

新句会は、選句発表会としての位置づけで、進行させていただくこととなりますが、今月、まずは皆さんが選句された兼題ごとの優秀句と、天賞句を発表し、それぞれ気になった点についてディスカッションをします。句会では声をあげて句を読むことの大切さが言われますが、今日も「披講（音読）は、句会の基本である」ことが、晶如さんから説明がありました。全員納得してこれを実行しました。選句された天賞句、最多得票賞（☆印）句は、下述のとおりですので、ご高覧下さい。

なお、先に申し上げてしまいますが、最近通信句会で提出句についての「ひと言」欄を設けております。このことは俳句上達には有効であり、今回も晶如さんからしばしば適切なコメントが発せられておりました。詳細は傘吉さんが纏めて下さっている「句会のまとめ」に記述されておりますのでご高覧下さい。

兼題1「植田」

◎『植田澄み動かぬ水の昼下がり』	多佳	天2☆7
◎『離陸機の影濃く発てり大植田』	栄女	天2
◎『見晴るかす植田連なる米どころ』	清助	天1☆7
◎『みおろせばうゑたひかりぬあきつしま』	蒼樹	天1

兼題2「昼顔」

◎『昼顔の楚々と破れ垣彩りて』	傘吉	天1☆9
◎『昼顔や道の端駆けるランドセル』	栄女	天1

兼題3「当季雑詠」

◎『蛍来る誰の遣ひぞまつすぐに』	白然	天3☆10
◎『遠き日の夫のなで肩白緋』	荻女	天2
◎『平凡な日々こそ良かれ柿若葉』	明峰	天2
◎『父の日や達筆血筋継げぬ吾』	一光	天1
◎『ラインにて菖蒲満開友元気』	柴楽	天1

兼題1では、多佳さんの句「植田澄み動かぬ水の昼下がり」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。田植が終わったばかりの田、俳句では季語として「植田」と言いますが、植えたばかりの苗が揺れないように、水田には水を一杯張るとか。この句はまさに田植え終了後の昼下がりを句にして成功しました。つい先ほどまでのお百姓さんのご苦労が見えてくるようで頭が下がります。次に栄女さんの句「離陸機の影濃く発てり大植田」が、天賞一つと高得票を獲得しました。大きな飛行機の機影が水田に映り、迫力のある句です。下五を大植田と表現したのも成功しています。

次に清助さんの句「見晴るかす植田連なる米どころ」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。まさにこの時期の日本の農村風景の典型であると思われます。もう一句、蒼樹さんの句「みおろせばうゑたひかりぬあきつしま」が、天賞一つを獲得しました。ご覧の通り全句を「ひらがな」体にして高得票を獲得しました。

兼題2では、傘吉さんの句「昼顔の楚々と破れ垣彩りて」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。破れ垣に昼顔の蔓が巻き付いている質素な景、その昼顔の花が彩る景とは……。しばし破れ垣を見入っている情景を思い浮かべました。寂しいですね。心に刻み付けられますね。次に栄女さんの句「昼顔や道の端駆けるランドセル」が天賞一つと高得票を獲得しました。ランドセルを背負い道の端を駆けていく子供たち、子どもたちの清純さ、頑健さが一緒になって見えて来ます。じっと昼顔の花を見ていると、それが見えて来ます。ひと言蘭には暑い夏の風景とあります。

席題3では、白然の句「蛍来る誰の遣ひぞまつすぐに」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）をいただきました。もう今はありませんが、通勤路の歩道にごく小さな小川があった頃の話です。蛍の来る光の筋を今も思い出します。次に萩女さんの句「遠き日の夫のなで肩白緋」が、天賞二つを獲得しました。優しい旦那様の白緋のスナップ写真が何枚も見えて来るようでした。特に白緋の着物には、幼い頃の思い出があり、自分にも父の着物を仕立て直してもらった白緋の着物があったように思い、懐かしさが格別です。

次に明峰さんの句「平凡な日々こそ良かれ柿若葉」が、天賞二つを獲得しました。歳を重ね高齢になるほど、平凡の良さがじわじわと身に染みて参ります。残されたこれからの人生も「無事は名馬」、平凡であり続けたいとの願いが伝わって参ります。下五の「柿若葉」がキラリと光ります。次に一光さんの句「父の日や達筆血筋継げぬ吾」が、天賞一つを獲得しました。「字を書く」という父の技に到達せぬ負の部分、天賞推挙のコメントにありますように「世間は広く穏やかなもの」との「考え直し」が大切なのでしょうね。自信をお持ちになっていることが一杯あると思いますが、ひと言申し上げます。もう一句、柴楽さんの句「ラインにて菖蒲満開友元氣」が、天賞一つを獲得しました。この句の上五「ラインにて」の解釈は、携帯電話の連絡ソフトの「ライン」と思われますが、どう解釈されますでしょうか。

「ひと言」

今日は柴楽さんの「ライン」の他にも、錦流さんの「見沼ブラ」がありました。錦流さんの句「見沼ブラ疲れた頃に甘酒屋」という句です。ここで使われた「見沼ブラ」という表現ですが、これも理解されませんでした。埼玉の見沼を知らない人が居ることです。「銀ブラ」、「元ブラ」、「電卓」、「スマホ」、「ライン」などなどが、俳人に使われる言葉ではありません。「世間で流行り出している流行語に類する言葉を俳句で使うのはどうか」とのご指摘を、住田先生に受けたことがあります。「品がない」という方も居ます。

私たちの目指している「伝統俳句」で、止められている言葉は使わない方が良いと思います。それともう一つ、俳句では「絶対だめです」という言い方はしません。「使わない方が良い」、「なるべくしない方が良い」という遠回しな言い方しかされません。俳句の

世界が「座の文学」である以上、得票をいただけない句、嫌われる言葉表現は、やはり「しない方がよいな」と、思わざるを得ません。俳句を学び始めたときに悩んだことですから一言申し上げました。

次回は7月8日（金）午後1時半開講です。本日、元気に百歳クラブ「道草」から別便にて、7月のスケジュールが送信されております。7月の日程は、6月27日に兼題の提示をいただいた以降、7月3日に投句一覧表がお手元に届く（メール送信）まで、スケジュールは進行していきます。どうぞよろしくお願い致します。

白然記